



オ

ーナーは、五十がらみの運動帰りのような軽快な服装と雰囲気をもった人だった。自分のイメージする九州人に近く、よくしゃべる人だった。茅葺きの生家を小鹿田焼を中心にしたギャラリーにして、自身も書やデザインをよくするらしい。JRのクルーズトレイン「七つ星」の観光コースにも組み入れられているというからかなりの目利きのだろう。しばらく小鹿田焼の話をしていたが、ぼくたちが松江から来たことをおもしろがって、観光地の話を互いにし始めた。オーナーは、萩の人とちよつとした言い合いになったという話をし始めた。

「明倫館なんかつまらん、って言いましたらね、明らかにムツとしているんですよ。」

そこからオーナーの自説が説かれるのだが、要は、ただの展示場所として公開するだけでそこを知ることができないはずがない、明倫館は明倫館として体験できる場所にすべし、と言うのだ。靴をそろえず上がったとしたら明倫館なら黙って見てはいいはずだ。資料を置いたところでだれも読みはしない。順路に沿って歩いたところで、何も見た気にならない。館風に合わねば叱られるような、館のかつての有り様そのものを提供した方がよほどエンターテインメントとしておもしろいんじゃないか。

空き家 5

木幡智恵美

生家の行く末②

かれこれ十年くらい前だと思うが、一通の封書が届いた。差出人に心当たりはなく、住所も九州の行ったことのないところからだ。恐る恐る開封して読むと、所有権放棄の書類に承諾なら押印し、返信用封筒に入れて投函するようにとのことだった。その不動産というのが、地価はほんのわずかな額なのに、関連する人の名が大勢書き連ねられている。並んだ名前をよくよく見ると、父方の従兄弟などの名前があり、叔父（故人）とその連れ合い（故人）の名前も見つけた。叔父の連れ合いの縁者だったのだ。そこに並んだすべての人に同じ書類が送られたはずだ。会ったこともない、行ったこともない土地の所有問題に、こんなに手間がかかるのかと驚いたものだ。

生家には、子どもたちが大きくなって付いてこなくなっても、庭に草が生えると除草剤を撒き、盆正月は掃除をし、仏壇を開け、傷んだところは修理してきた。家を維持することだけで、自分が居なくなった後のことまで考えてはいなかった。それに目を向けねばと思わされたのが、あの封書だった気がする。

それが、封書のことやがて頭から消え、孫の世話や義母の介護に日々流されていく。見ようとしなかった目の前の課題に引き戻されたのが義母の死だった。子どもたちにはそれぞれ自分の生活があり、夫と二人で考えることになる。どちらかが介護が必要になれば、身動きがとれなくなってしまう。まだ思考でき、行動できるうちに事をおこさねばならない。

とは思いつつ、まだ現状維持を続けている。先日は、生家の庭に生えた木を伐採し、一昨年の夏に撤去したプレハブ跡に切り取った枝を運んだ。夫が切った木の始末をしていると、「おい、母さん、来て」と言うので呼ばれた場所に行くと、すっかり枯れてしまったと思っていたイチジクの朽ち木の下から、小さな新しい枝が出ているではないか。「あ、これ、切らないでよ」と返す。まだまだ、踏ん切りがつきそうにない自分がある。

なるほど確かにおもしろい。前回九州に来たとき訪れた教会を思い出す。今も祈りの空間として地元の人に大切にされていることが建物全体から感じられて、見学場所は制限されていたのに強い印象が残った。オーナーは、それに続けて、なぜそう思うに至ったかきつかけになる出来事を語った。

「日田に咸宜園という江戸時代の私塾があります。それはもちろん知っています。今朝行った。」

「そこで上がるように言われて、夫婦で話を聞いたんです。途中で『お二人は話を聞いておられません』とひどく叱られましたねえ。」

なぜまったく知らなかったこの店に立ち寄り、オーナーの帰宅を乞われるままに待ち、昼を過ぎても双方のおしゃべりが続いたのか。すべてはこの話にたどりつくための助走だったのではないか。

「叱られたんだけど、不愉快じゃなかったんです。この年になると叱られることなんてないですしね、これはおもしろいと思っただけです。」

実は、私も今朝叱られました、と咸宜園での出来事を話すとオーナーは膝を叩いて笑った。同一人物としか考えられない人から叱られたのだが、それをエンターテインメントのアイデアにまで昇華させる人物の前に、ぼくたちはみんなご機嫌になった。

30代フリーター 社会学者の大澤真幸が朝日新聞のインタビュで、人間にしかできないと思われてきた創造性の必要な仕事こそAIは得意としていると指摘していた(11月2日朝刊)。一般に創造性が高いと言われていた仕事は、実はたいして過去にだれかが思いついていて、生成AIはそれを探し出してやってしまう、と。

年金生活者 AIが生成するのは、すでにだれかが思いついたものばかりではない。短歌を生成するAIがある。上の句を入力すると、即座にいくつもの下の句を出力する。そのレベルはまだ人間にはおよばないが、いずれ追い越すのではないかと考えられている。

だが、いくらAIが高度な短歌を作れるようになって、AI自身はそれを味わい、それに感銘を受けることはない。AIにはできなくて、人間にしかできないことをあげるとすれば、それは「創造」ではなく「鑑賞」だ。創造を仕事一般に置き換えて考えれば、人間にしかできないのは、仕事ではな

るために存在している受付けやドアテンダント、雇用主のために他人を脅したり欺いたりする顧問弁護士や広報スペシャリストなどを指す。

そうした仕事の従事者の中には、自分のしていることの「クソどうでもよさ」を覆い隠すために、仕事に嗜癖し、ワーカホリックになる者も出てくるだろう。それは人間だけができることで、AIにはできない。

30代 そんな仕事がない存在しているんだ。

年金 資本主義的な競争の勝者がそのポジションを維持するため、と考えれば納得しやすい。それらは本来は不必要なもので、社会的に有害でさえある、とグレイバーは考える。

しかし、それらを人為的になくすことはできない。法律で禁止すれば、職業選択の自由を定めた憲法のある国なら、訴訟が相次ぐだろう。一時的にはなくなるかもしれないが、形を変えて復活するか、代わりの「クソどうでも良い仕事」が出現するだろう。「ブル

く、仕事の成果を享受することだと言わなければならない。

30代 人間は仕事より遊びに向いている。

年金 私たちが仕事と呼んでいるものは、賃労働をはじめとして、いずれも対価を得るための労働を指している。言い換えれば貨幣によって交換されるのが仕事であり、それは特定のだけかにはできないものではなく、その従事者は交代が可能だ。AIが人間の仕事を奪ってしまう理由がそこにある。

これに対し、「鑑賞」や「享受」や「消費」はだれかに代わってもらうことができない。おのれの五感、おのれの感情、おのれの知性だけがそれをできる。大澤はインタビュで「ピンとくるとか、腹に落ちるといった感覚」を挙げ、「生成AIを利用して、この理解の仕方はできません」と語っている。それはAIが「鑑賞」も「享受」も「消費」もできないことに由来している。

30代 人間の仕事がAIに奪われてし

ット・ジョブ」は資本主義が必然的に生んだものだからだ。

「脱成長コミュニティ」を掲げる斎藤幸平は、その実現のために「私たちがなすべきこと」を列挙している(『人新世の「資本論」』)。そのひとつに「労働時間の短縮」があり、そのために「例えば、マーケティング、広告、パッケージングなどによって

まうと、「多くの労働者は生きる意味を失い、アイデンティティの危機に陥るでしょう」と大澤は予測している。「自分の価値がどう評価されているかについて、労働市場での成功と切り離すのは難しい。他者から必要とされず、承認もされない中で自分の生きがいを保てるかと言われたら、私も自信はありません」と。

年金 「労働者のアイデンティティ」を支えている力をひと言で言えば貨幣の力だ。それはどんな商品でも、欲しいときに手に入れることができるはずだという万能感を人に与える。人間はその貨幣の支えを失いそうになれば、それを手離すまいとして、どんな仕事にでもしがみつくと可能性がある。

大澤は、アメリカの人類学者デヴィッド・グレイバーの言う「ブルシット・ジョブ(クソどうでも良い仕事)」を例にあげ、「人間にとつてはそんな仕事ですら人生のよりどころとなる」と言う。「ブルシット・ジョブ」とは、たとえばだれかを偉そうにみせ

人々の欲望を不必要に喚起することは禁止される」と書いている。

「禁止」すれば「脱成長コミュニティ」が資本主義に取って代わる条件のひとつが整うと言いたいようだ。それは因果が逆だ。資本主義が終われば、それらの仕事は禁止しなくても消滅する。だからといって、禁止すれば資本主義が終わりに向かうことなどあり得ない。

30代 資本主義が終わるとすればどんなときだ。

年金 資本主義の打倒を目指す革命運動は、マルクスの時代には経済恐慌を、レーニンの時代には帝国主義戦争を革命に利用しようとした。だが、それらの危機はいずれも資本主義に自己修正を強いることよって、その延命に手を貸した。代わりに気候変動を利用しようとする考えがいま出てきているが、同様の運命をたどるだろう。

資本主義はもう発展の余地がないところまで発展し尽くしたときにしか終わらない。

ニュース日記 900
中村 礼治

AIと資本主義